



キンシャサの軌跡



JICAコンゴ民主共和国事務所通信

2016年5月 Vol. 20

Kinky Shot! -今月のキンシャサ-

所長会議サイドイベントで優勝！噂のゴマチーズ♪



スライスして食べると
オシャレ度もアップ♪

所長会議のアフリカ部サイドイベントとして恒例となった「一国一品」。各所長が持ち帰った任国の自慢の一品の品評会が4月21日にJICA内の食堂で行われた。

今回はアフリカ大陸の20ヶ国からの「舶来モノ」が食堂に集結、ワイン、ビール、現地産蒸留酒、ジャム、チョコレート、ビール、ヤシ酒、ナッツ、ドライフルーツ、ツナ缶、チーズなどが勢ぞろい。アフリカという土地柄か、ナッツやビール、チョコレートの出品が多い中、コンゴ民は唯一ゴマ地方の手作りチーズで参戦。チーズをカン十層のように薄く切るフランス製の道具で優雅にプレゼンした。

昨年は蜂蜜を出品、2位であったが、今年は審査員票10票中3票を集めコンゴ民が堂々優勝。チーズの試食が功を奏したが、これは青木所長の審査員への「営業」の成果か「無理強い」か、評価が分かれるところではある？！

トレンド発信地・渋谷をも賑わせた「サフル」に迫る！

Brazza Life! -ブラザビルで生きる-

2016年4月、渋谷の西武百貨店にてサフル写真展が大盛況のうちに幕を降ろした。この写真展に合わせて来日したサフル達が各種メディアを賑わせたことが記憶に新しい方も多いのではないかと。

昨今ではすっかり有名になり、コンゴの代名詞として定着しつつあるサフル(sapeurs)。「平和でなければお洒落はできない」をモットーに戦争の無い平和な社会を願いつつ、何か月分もの給料を注ぎ込んで手に入れたハイブランドのファッションアイテムに身を包む紳士達である。サフルの「本場」はコンゴ民の対岸の国、コンゴ共和国の首都ブラザビル。

前出の写真展の展示作品は写真家・茶野邦雄氏によるもの。沖縄を拠点に広告写真等を手掛ける茶野氏とサフルの出会いが英国の某・黒ビールのCM。画面の中で優雅に闊歩するサフルに魅かれ、以来何度もコンゴに足を運び、50名以上のサフルの姿を写真に収めてきた。その作品は写真集「THE SAPEUR コンゴで出会った世界一おしゃれなジェントルマン」でも楽しむことができる。

茶野氏の撮影現場には老若男女問わずいつも沢山のコンゴ人が集まってくる。サフルは、コンゴ人にとって平和の象徴・ヒーローなのだ。コンゴの街中をサフルが華麗なステップを披露し練り歩く、そんな平和な日々が続くことを願う。そしてその実現に私たちの協力が少しでも貢献できますように。



茶野氏のサフル撮影風景



サフルは子供たちにも大人気のヒーロー！

Eat Kin! -キサングニで食べる-

海はなくても川と湖がある！
キサングニの淡水魚！！



キサングニの魚市場には見渡す限りの魚、サカナ、SAKANA！



コンゴ民のワカサギ(?)

日本の6倍の面積を誇るコンゴ民だが、海岸線はごくわずか。海産物はほとんど輸入に頼っている。しかし！！コンゴ民にはアフリカの半分と言われる超豊富な淡水がある！コンゴ民の地方料理の中にも淡水魚を素材としたものもたくさんあるのだ。

コンゴ民で川魚が有名なエリアと言えば、それはキサングニ！かつてはコンゴ民第三の都市であり、3大国立大学の一角を成すキサングニ大学を擁する。ここはコンゴ民が誇る農業と漁業のメッカ。特に怪しい伝統漁具を用いるコンゴ川の伝統漁法は、数年前に日本の某お笑い芸人がチャレンジしたほどの知名度なのだ！

コンゴ川の魚というと、どんなイメージが湧くだろう…。巨大ナマス？鱧がすごそう？え、干物の匂いが強烈そう？確かに巨大な魚も多く取れるのは確かだが、実はけっこう日本人にも食べやすい小魚料理もある。その名も「ンダカラ」。コンゴ民東部で特に多いポピュラーな料理だが、もちろんキサングニでも楽しめる。ワカサギのから揚げに近いお味と食感で、ビールのつまみに最高！

え？コンゴ民でワカサギなんて信じられない？ん～DA・KA・RA、本当だって！？

保健連載最終回は折に触れてご紹介した、エボラ対策支援についてです！

まずは患者の出入国をチェックするため、NEC社のサーモグラフィカメラを14台、コンゴ民の主な玄関口(空港や港)に供与しました。空港でカメラの前を通るたびに、警報が鳴ったらどうしよう！？とちょこっと心配になったりならなかった。

7度のエボラ発生を経験したコンゴ民の知見を周辺国にも波及すべく、2015年3月に保健アドバイザー、コンゴ民専門家数名がコートジボワールに渡り、意見交換するとともに研修を実施しました。その後、同国のエボラ対策のモジュール(教科書)及び標準手順書の策定も支援しました。

コンゴ国内でもWHO等他ドナーの賛同を得ながら、8つのエボラ対策モジュールと標準手順書を最終化し、製本しました。

これらのモジュールを教科書に、2015年8月にはセネガル保健関係者22名を、2016年1月には「仏語圏保健人材広域ネットワーク(RVT2010)」の8参加国、40名をキンシャサに招き、エボラ対策研修を実施しました。研修の目玉はやはりキンシャサ郊外にあるエボラ治療センターで実施したシミュレーション！患者役の看護師が迫真の演技を見せ、緊迫感漂う中大汗をかきながら防護服の着脱をしたり、問診、検体受け渡しなど、参加者も講師も真剣そのもの！今年度にももう一度研修を実施予定です！

本格的に感染症対策もやろうとの野望を実現させるべくコンゴ民の保健は走り続けます！引き続き要注目です☆

次回からはよいよ職訓の連載が始まります！皆さまお楽しみに～♪



キンシャサのンジリ国際空港でのサーモグラフィカメラ設置



防護服を脱ぐ手順を間違えると感染の危険にさらされるため、真剣！！

マタティ橋～コンゴ民と日本、過去と未来を繋ぐ架け橋～
保全工事が本格化！



マタティ橋全景



ケーブル上の技術者たち(桁上より)
マタティ橋を守るため、今日も高所で大活躍！

コンゴ民の広大な国土を縦断するコンゴ河。総延長は世界第4位、流域面積と平均流量は世界第2位を誇る大河で、コンゴ民と隣国・コンゴ共和国との国境にもなっています。

このコンゴ河に架かるただ一つの橋がマタティ橋、日本の有償資金協力(円借款)で1983年に完成した吊り橋です。ちょうどその頃、日本では瀬戸大橋に代表される本州四国連絡橋の建設工事が最盛期に差し掛かり、吊り橋の設計・施工技術が飛躍的に向上した時期でした。この建設に携わった日本人技術者が当時コンゴ民にも派遣され、マタティ橋は当時の日本技術の集大成により完成したと言えます。

吊り橋は桁(人や車が通行する部分)を金属製のケーブルが支えており、川の上に架かっているため湿気が多いことから、ケーブルが錆びてしまうことがあります。マタティ橋の完成後、約30年間の技術革新により、ケーブル等に空気を送って湿度を下げ、錆びを防ぐ装置が開発されています。この装置をマタティ橋に設置し、併せて雨水の侵入を防ぐためにケーブルを再塗装する無償資金協力「マタティ橋保全計画」を2017年1月までの予定で実施中です。

ケーブル上での作業のためにゴンドラのような機材も設置されていますが、マタティ橋を管理する公社OEBKの技術者たちは安全ベルトを着け、自分の足で軽々とケーブルを上って行ってしまいます。最も高い場所は桁からの高さだけでも約80m、川の水面からの高さは150mを超えますが、そんな高さも何のその。

今日もケーブル上でコンゴ民と日本の技術者による共同作業が繰り広げられます。2つの国の架け橋、友好の象徴であるマタティ橋を長く後世に繋いでいくために。

コン月のイベント

愛すべき？コンゴ人



所属:コンゴ・セントラル州保健大臣
氏名:テレス・ルイス・マンフ

いつもおしゃれなコンゴ・セントラル州保健担当大臣、マダム・テレス。保健人材開発の重要性を理解し、プロジェクトの進捗状況をいつも熱心に聞いてくれる心強い味方。

「INPESSで子供に質のいい教育を受けさせられる」マタティ橋はマタティの誇りです。とはJICA事業紹介映像作成時のインタビューの一コマ。

編集後記

<☆今月のインガラ語☆> 「エザ マリ川」
早朝や夜、外にいるガードマンが厚手のジャケットを着て「エザ マリ川」とつぶやく季節がやってきました。ちょっと空調の効きすぎたレストランで使ってみよう！

先月号の答えは、「エンジンつけろ(ちょっと意識)」。早く出発したい時に運転手に言うのと効果があるかも！？

さて、キンシャサは乾季に入り、過ごしやすい季節がやってきました。季節の変わり目のせい、マラリアにかかるコンゴ人がちらほら。キンシャサにお越しの際は蚊対策をお忘れなく！
それでは、次号もお楽しみに～！